

## 「私」を語ること

——フィリップ・ロスの『事実——ある小説家の自伝』の場合——

平 田 ユ ミ

実在の作家フィリップ・ロス (Philip Roth 1933-) とイメージの重なる作家ザッカーマンが主要人物として章ごとに異なった人生を生きるフィクション、『背信の日々』(*The Counterlife*, 1987) を出版した翌年、ロスは『事実 — ある小説家の自伝』(*The Facts: A Novelist's Autobiography*) という「自伝」を発表した。一見、自伝という形を取っているこの作品は、「自分」というペルソナを巧妙に描いている「自伝的小説」である。『事実』における語り手である「私」は、極めて意識的に作中人物としての「私」<sup>イコール</sup>「フィリップ・ロス」を語る。<sup>(1)</sup> 作家フィリップ・ロスの創造力が産み落とした「自伝」の語り手「私」、即ち「フィリップ・ロス」が、前作までのザッカーマン同様、そこで語られる物語の主人公となっている。ロスが「自伝」の中で自分を語れば語るほど、ペルソナ化された「フィリップ・ロス」は、多様な「私」に分裂していく。「フィリップ・ロス」が生きてきた間に状況が多様化し、それによって生活に関わる種々のパラダイムが壊されていく中で、それに呼応するかのように、ロスの作品における「私」<sup>イコール</sup>「フィリップ・ロス」の自我も多様に分裂していく。ロスは、唯一絶対的な認識というものが果して存在するのか否かという事柄を、文学的なものの中に表現していくひとつの技法として重層的に分裂する自我（それぞれが分裂しつつも、視点を変えれば三次元的に重なり合う部分を持っている自我）を用いているのかもしれない。本稿では、この複数に分裂する自我（別の言い方をすれば、多重にペルソナ化された括弧付きの「私」）に焦点を当てる。そしてさらには、分裂することに

よって「私」が統合されるという一種のパラドックスを導くことが可能かどうかについても考察したい。

## 1. 『事実』において分裂する「私＝ロス」像

Linda Matchan が『事実』の回想の部分で展開される「ロス」の人生を5幕からなるドラマに例えている<sup>(2)</sup> ように、『事実』は、少年期から作家として名を成すまでの三十代半ばまでの「ロス」の人生の回想部分（「自伝」）を核とし、この「自伝」を出版すべきかどうかを尋ねる「ロス」の手紙と、出版を否定し「ロスの自伝」を批評するザッカーマンの手紙とを「自伝」の前後に配置するという、「自伝を内包した創作」という特殊な形式を取っている。そして、回想部分では、ニューアークでの少年時代、青年期のバックネル大学時代とシカゴ時代、苦渋に満ちた最初の結婚生活、ユダヤ系作家としての経験等が語られていると同時に、ここでは、それぞれの時代で様々な経験をしている最中には意識していなかった事柄に関する、55才の熟練した作家「ロス」の視点からの分析・見解も盛り込まれているのである。

それでは、具体的にロスの人生劇場の第一幕である子供時代から見ていくことにしよう。「子供時代のロス」は、金曜の夜には遊び仲間達とルーズベルト・シアターへ二本立ての映画を見に出かけ、その帰り道にはあちこち寄り道をし、自由なアメリカの雰囲気を楽しむ子供時代を過ごしていた。以下はその回想部分である。

Stretched on our backs in the open night air, we were as carefree as any kids anywhere in postwar America, and certainly we felt ourselves no less American. . . . About being Jewish there was nothing more to say than there was about having two arms and two legs. It would have seemed to us strange not to be Jewish — strange

still, to hear someone announce that he wished he weren't a Jew or that he intended *not* to be in the future.

Yet, simultaneously, this intense adolescent camaraderie was the primary means by which we were deepening our *Americanness*.  
(31)

「子供時代のロス」にとって、自分がアメリカ人以外の何者でもないことは確かなことであった。また同時に、自分はユダヤ人である、ということもまた自然なことであり、ユダヤ人でないことの方が不思議なことだった、とここでは語られている。換言すれば、〈アメリカ人である自分〉と〈ユダヤ人である自分〉は、子供時代のロスの内面で一体化されたものとして存在しており、それに関して何の疑念も抱いていなかったということである。極端に言えば、「子供時代のロス」にとってユダヤ系アメリカ人であることがアメリカ人であることだったのかもしれない。そして、「子供時代の私」の内面にそのような二重性が混在していたと分析しているのは「55才の私」、即ち、「語り手としてのロス」であり、子供であった時点では、自己に内在していたそのような二重性を相対化して認識してはいなかった、ということをごここから読み取ることが出来るのである。この二重性の混在状況はまた、次の記述の中でも象徴的である。

The solace that my Orthodox grandfather doubtless took in the familiar leathery odor of the flesh-worn straps of the old phylacteries in which he wrapped himself each mornings, I derived from the smell of my mitt, which I ritualistically donned every day to work a little on my pocket. I was an average playground player, and the mitt's enchantment had to do less with foolish dreams of becoming a major leaguer, or even a high school star, than with the bestowal of membership in a great secular nationalistic church from which

nobody had ever seemed to suggest that Jews should be excluded.  
(32)

ここではまず第一に、子供時代にロスが常に携帯していた野球のミットと、正統派のユダヤ教徒であった彼の祖父が毎朝身に着けていたユダヤ教の聖句箱 (“phylacteries”)<sup>(3)</sup>の使い古した革紐との共通した革のにおいへの言及がなされている。そしてさらには、子供時代の自分が野球のミットに求めていたのは、メジャーリーグになるというような実現の可能性のない夢ではなく、むしろ、ユダヤ人排斥を唱えないような “great secular nationalistic church” からメンバーシップを贈られる<sup>(4)</sup> ことであった、という考察がここで成されている。このことは、アメリカ民主主義の構成員になることの方が、「子供時代のロス」にとって重要なことであったということを表している。そしてさらに、アメリカ的現象を象徴する野球のミットを常に身に着けるということは、「子供時代のロス」にとってアメリカ人としての自分を象徴するもの、つまり自己のアメリカ性を外部に対して表明するための手段でもあったのかもしれない。例えば、常にミットを携帯していたにも関わらず、「子供時代のロス」が、メジャーリーガーへの憧れ（あるいは少なくとも高校野球界の花形になるという野球好き少年が抱きがちな夢）に胸を膨らませてはいなかったこと（というよりもむしろ、“foolish dreams of becoming a major leaguer” という表現に見られるように、子供っぽい憧れに対して投げかけられた醒めた視線等）は、「子供時代のロス」なりの、アメリカ性表明の手段としてのミットの意味を強調しているように思われる。

しかし、また一方でミットを身に着ける行為は、ユダヤ人としての彼の感覚をも浮かび上がらせていることも否定出来ない。例えば、正統派のユダヤ教信者である彼の祖父が毎朝身に着けるユダヤ教の聖句箱の使い古した革ひものにおいと、自分が携帯しているミットののにおいとを重ねて意識するということは、祖父が身に着ける聖句箱に象徴されるユダヤ性

と、ミットが象徴するアメリカ性を「子供時代のロス」が同時に受け入れている心的状況を示唆しているようである。そしてそれはまた、アメリカ人としての自己認識とユダヤ人としての自己認識という、内在する二重の自覚が日々の生活の中で常に呼び覚まされている状況を象徴しているようでもある。ここでも、アメリカ人としての意識とユダヤ人としての意識は、双方が共存している形で一体化されているのである。そして、回想の語りの時点で改めて振り返ってみると、革のにおいひとつを取ってみても、二重の意味（ユダヤ性／アメリカ性）を持っていたのだ、と「55才のロス」はここで語るのである。

このように、子供時代から二重性を内包し、それを自然な形として受け止めてきた「ロス」は、青年期を迎えてさらに複数の二重性を抱えるに至る。以下の引用はそれら複数の二重性（相対する性質）が顕著に現れている部分である。

I was quite tame, a good, responsible boy with good, responsible friends; I couldn't have been more dutiful and well mannered, and lacked anything resembling unconstrainable impulses; but I was also strong-minded and independent, and if my father were to challenge the ordering of my private life, now that I was a college student, I would feel suffocated by his strictures. I had also outgrown the family dinner table and was as impatient as any rapidly maturing adolescent with my parents' conversation, but the main reason that I wanted to get away from home for my sophomore year was to protect a hardworking, self-sacrificing father and a devoted but determined son from a battle that they were equally ill equipped to fight. (38, 下線筆者)

ここでは、「従順」あるいは「飼い慣らされた」（“tame”）側面と、「断固

とした」(“strong-minded”)「独立心の強い」(“independent”)側面との対立が先ず第一に記されている。次いで、道徳的な父親の拘束を「息苦しく」(“suffocated”)感じ、「家から逃れたい」(“I wanted to get away from home”)と思う、つまり、息苦しさを感じさせる根元である父を疎ましく思い、その拘束から逃れたいと願う一方で、家族の生活のために己を犠牲にして働いてくれている父を思いやり、断固とした態度を取る息子(自分)との衝突から父を「守るため」(“to protect”)に自分は家を出たいんだ、と「ロス」はここで述べている。息苦しさを感じさせる父の道徳的な面を疎ましく感じながらも、家族を守るために惜しみない努力をする実直な父を大切に思う自分(「ロス」)もまた、確かに同時にここに存在しているのである。

また、女性と付きあうことに関しても「ロス」は二重性を露わにしている。例えば、彼は彼の交際相手であるジョウジーとゲイルという、タイプの異なる2人の女性について次のような分析を行ってみることもする。

Josie, with her chaotic history, seemed to me a woman of courage and strength for having survived that awful background. Gayle, on the other hand, because of all that family security and all that father love, seemed to me a girl whose comfortable upbringing would keep her a girl forever. Gayle would be dependent because of her nurturing background and Josie would be independent because of her broken background! (90)

恵まれた家庭に育った依存的なゲイルに対して、不幸な生い立ちから独立心の強い人間に育ったジョウジー。反転可能とも見られる属性を備えた彼女達のどちらにもそれぞれの魅力を感じて付き合った「ロス」ではあったが、結果的にはどちらも帯に短し襷に長し、といったところであったようだ。後に、二度も中絶させたという負い目も手伝って、やむなく

独立心の強さが魅力のジョウジーと結婚する道を選ぶに至るのだが、彼女は「ロス」の母親に平気で自分の汚れた服を洗濯させることに象徴されるような、両親と会わせるにも気の引ける相手であるばかりか、二度の中絶さえ彼女の狂言だったのかもしれないという疑惑が次々と浮上する。そして策略的な女ジョウジーに対する「ロス」の嫌悪感が増すばかりで、最終的には関係は崩壊するに至る。その後、正式な離婚に至る前にジョウジーが自動車事故で亡くなってしまうので、二人の関係は一方の死という形で断絶されたまま宙に浮いた状態で終わってしまうのである。

## 2. 『事実』における自己解体の諸相 — 「ロス」と ザッカーマンの関係

物語論の研究者であるジェラルド・プリンス（Gerald Prince）は、物語における叙述と物語られるものとの間に存在する時間の関係について次のような見解を表明している。

叙述と物語られるものとの間の時間的距離は変化することがある。前者が後者から時間的にますます遠ざかる場合もある。例えば、1940年の事象を1950年に語りはじめ、1955年に語り終えとかがそうである。他方、両者が次第に近づいてくる場合もある。1940年から1947年までの事象を1950年に語りはじめ、1951年に語り終えとかがそうである。勿論、叙述が時間的に物語られるものから遠く隔たっていて、次に近づき、再び離れるということもある。（35）

上記のプリンスの物語論に沿って『事実』における語りを考察してみるならば、ニューアークでの子供時代から、作家として身を立てた35才の「私」までを描く回想の部分は、それ自体が語り終えられた時点で、語り

手である55才の「私」に時間的に近づいてくると考えられる。しかし、それだけでは終わらない。というのも、回想と語り手が時間的距離を近づけ、それらが一連の時間の流れの上に築き上げられた自伝として機能しようとするその時、最後に加えられた、ロスのフィクション中の登場人物ザッカーマンからの手紙が挿入されることで、それまでの叙述は、いわゆる自伝としての機能を果たせなくなってしまうからである。とはいえ、語り手である「ロス」が架空の人物ザッカーマン宛ての手紙を書いている時点で、自伝は既に自伝ではなくなっている、という感も否めない。しかしプロローグで著者が架空の読み手に語りかけるという行為は、格段珍しいことではない筈だ。だが、ザッカーマンから「ロス」への返信が加えられること、即ち架空の人格ザッカーマンが登場人物として「ロスの自伝」に関わってくることによって、自伝はフィクション性の強い自伝的物語、換言すれば括弧付きの「自伝」へと姿を変えるのである。こうなってくると、「語り手としての私」と「回想中の私」との間にもフィクション性が介在してくることになるであろうから、つまり、「回想中の私」は「語り手としての私」によって脚色された私なのであるから、それぞれの「私」は分裂的なものとして区別して考えていく必要性がおのずと生じる。

『事実』における「語り手としての私」と「回想中の私」との関係については上述したとおりである。それでは、「私」と「私」によって呼び出された人格、即ち「ロス」とザッカーマンの関係はどのようなものであろうか。簡潔に例えるならば、それは写真におけるポジとネガの関係のようだ、といえるだろう。それぞれが互いを焼き直すことによって生じる関係にあるということである。このことは、ザッカーマンが「ロス」に宛てた手紙の中で両者の切っても切り離せない関係について語る、  
“Well, on the evidence of what I’ve just read, I’d say you’re still as much in the need of me as I of you — and that I need you is indisputable.” (161)  
という言葉とも重なってくるのである。加えて、『事実』の著者としての



ロス（括弧の付かないフィリップ・ロス）が、Jonathan Brent とのインタビューにおいて以下のように強調しているように、相反する二つのキャラクター（ここでは「ロス」とザッカーマン）のどちらが欠けても、『事実』は完成したものになりえないのである。

I agree with Zuckerman. I agree with myself. This book wouldn't be my autobiography without Zuckerman there as a challenge, putting a torch to the whole thing, nor, of course, would it be autobiography if he were there by himself. Either without the other is a fiction. (*Conversations* 234)

Matchan は“a guest appearance” (*Conversations* 239) としてのザッカーマンを指摘しているが、確かに一見するとザッカーマンは『事実』にゲスト出演し、「ロス」の「自伝」に関して、同じく作家の世界に生きる第三者の作家として批評を与えている。「ロス」によって語られる回想を反転させ“counter-facts”を提示し、回想の語り手としての「ロス」の“counter-voice”として存在するザッカーマン。ザッカーマンは送られてきた「ロス」の原稿に目を通した上で、“Your gift is not personalize *your* experience but to personify it, to embody it in the representation of a person who is *not* yourself. You are not an autobiographer, you're a personificator.” (162) と評価する。そして、自伝作家としての才能は「ロス」にはなく、あるのは経験を虚構にする能力だ、と「ロス」の能力を厳しく分析にかけ、「ロス」の“front man” (165) として文学的手法のあり方についてザッカーマンはここで言及するのである。さらには、『事実』の回想の部分で「ロス」によって写し出される若き日の出来事と、それらの出来事に関する「ロス」の見解にザッカーマンの手紙をつけ加えることは、「ロス」の“self-defensive trick” (192) であるともザッカーマンは結論づけているが、本当にそれだけなのだろうか。もちろん、ザッカー

マンは「ロス」の「自己防衛的トリック」に一役買う役割も果たしている。しかし、そのためだけに呼び出された人格というよりも、むしろザッカーマンは、構築された「ロス」の「自伝」が自伝ではなくフィクションであるということを周到に検証し、崩しにかかる働きの方に重要性が置かれた人格なのではないだろうか。なぜザッカーマンの力を借りてまで入念に組み立てた作品（『事実』は、「自伝」に登場する当時の友人達や家族に連絡を取り、過去の出来事における事実確認を行って完成させたものである。それに関しては *Conversations* の中で述べられている<sup>5)</sup>）を壊すような暴挙に、ロスは自ら及ぶのか。「ロス」が「自伝」の出版に際してわざわざザッカーマンを相談相手として引っ張り出してきたのも、ザッカーマンが「ロス」の「自伝」を完全に否定しなからとも長々と真剣に「自伝」の評価に時間を費やすのも、両者をそのような行動に駆り立てる何かがそこに存在しているからである。

では、そこには一体何があるのだろうか。一体、何故「ロス」とザッカーマンによって書かれた手紙が「自伝」の中に組み込まれる必要性があったのだろうか。ザッカーマンは「自伝」の否定のために駆り出された、「自伝」の破壊者としての役割を担った存在なのではないだろうか。彼は、小説家としての生命と人格をロスによって吹き込まれた、ザッカーマンというペルソナなのである。そして同時に、回想の語り手としての「ロス」を反転させることによって生み出されたのが「ロス」に対峙し審問する者としてのザッカーマンなのである。

1987年の春に、それまでは“minor surgery” (5) として取り組んできた創作活動について、“a prolonged physical ordeal” (5) とすら感じてしまう“emotional and mental dissolution” (5) の危機的局面に達した「ロス」は、この時点で何としても作家としての生命力を取り戻し、自身の創造性の再生を成し遂げる必要があった。“Here, so as to fall back into my former life, to retrieve my vitality, to transform myself into *myself*, I began rendering experience untransformed.” (5) という「ロス」の言葉

が示しているように自己再生、あるいは自己刷新を果たすためには、適切な治療を行うための前段階として、病んだ部分を正確に探し出す必要がある。そのためにはまず、細部に至るまで入念に自己を検証してみる必要がある。自己を検証するということは、自己を客観的な視点から分析してみることであり、それはつまり、「私」は「私」以外の何者でもないという揺るぎないひとつの事実が、本当に揺るぎないものなのかどうか一度疑ってみることもである。そしてそれが構築されたく自己という砦を足場から突き崩すこと、自己を解体してみることに繋がつてゆくのである。さらに、このく解体くのプロセスが適用されて生じたく崩壊くのプロセスは、作品中における人と人との関係にも適用される。というのも、ロスの作品では、信頼や愛などのようなく人と人との繋がりくは常に崩れていく傾向にあるからだ。『事実』における回想中でいえば、彼と関係を持つ複数の女性達との長続きしにくい関係（それも、ほとんどが相手の女性に対する「ロス」の側からの幻滅による破局）は、その顕著な例であろう。

ザッカーマンに宛てた手紙によれば、「自伝」の中で「ロス」が記述していくものは、自分にとってく事実くが何を意味するのかを探求するための論考でもあるようだ。これに関して「ロス」はザッカーマンに以下のように語っている。

There is something naïve about a novelist like myself talking about presenting himself “undisguised” and depicting “a life without the fiction.” I also invite over-simplification of a kind I don’t at all like by announcing that searching out the facts may have been a kind therapy for me. You search your past with certain questions on your mind — indeed, you search out your past to discover which events have led you to asking those specific questions. It isn’t that you subordinate your ideas to the force of the facts in autobiography but that you

construct a sequence of stories to bind up the facts with a persuasive hypothesis that unravels your history's meaning. (8, 下線筆者)

ここで述べられている「事実と、歩んできた人生の意味を解明する説得力のある仮説とを結びつけるために一連の物語を構築すること」が、「自伝」の語り手としての「ロス」が目指したことであり、その信念の下で書き上げられたものが回想の部分である。しかし、そのようにして構築された「ロス」の仮説は、より説得力のあるザッカーマンの指摘によって次々と切り崩されてゆくのである。そしてその切り崩しのプロセスが繰り返されることによって主人公の内面には、確かに見えても次の瞬間には崩れてゆく、「確かなもの」であるはずの事象に対する疑念が常に燃り続けるのである。そうして「自伝」は否定される。

「ロス」は「自伝」を明らかに肯定的に語ってはいるが、手放して自分の過去を語っているわけではない。「自伝」を語る55才の「今」になってもまだ、ジョージーへの被害者意識を持ち続け、彼女を否定的な側面からのみ語っていくのである。この状況から判断すると、「55才のロス」の語りは客観的なものとはいえない、ということになるのではないだろうか。となると、『事実』における語りの客観性を高めるためには、「ロス」によって語られた「ロスの解釈する事実」を反対の視座から客観的に検証していく存在（突き放した立場から冷静に分析していく存在）が必要となってくる。そして「事実とは何か」ということを考えるうえで、パースペクティブ、あるいはペルソナを変えて事実を検証するために「ロス」の反転させられたキャラクターとして登場するのがザッカーマンなのである。ザッカーマンは満を持して登場する、『事実』における「事実」を検証するための仕掛けとして出版否定・批評の手紙を提示する必然の存在なのである。

### 3. ポストモダンの時空

回想中で言及される事実・事件を中心軸として反転する、解体され分裂した複数の断片化された「私」像。そして反転されたもとはその場にそのままに残っているから、「私」はどんどん増殖していくばかりである。しかもそれらは統合された一人の「私」像を構築しようとする流れにあるわけではないので、それらは依然バラバラの状態で併置されているのみである。そしてそれらの反転された複数の「私」が、「自伝」という場で共鳴し続けているのが『事実』の時空なのである。さらには、二つの相反する価値観を表出する、反転（あるいは回転）させられた多重な「私」像と共に、「私」を語り進めてゆく「ロス」（セルフ）と、そこで語られることに対峙するザッカーマン（カウンターセルフ）も、『事実』の語りの時空で分離し浮遊しながら共鳴し続けているのである。多様な「私」像が共鳴し続けている、この『事実』という作品の場では、分裂することによって「私」が統合されるという一種のパラドックスを導くことは、幻想にすぎないのかもしれない。

『事実』におけるこのような状況は、〈ポストモダンの〉なもの<sup>(6)</sup> だといえるかもしれない。もっとも本人（ロス）は、そのような言葉によって自己の作品が分類されることに対して、次のように否定してはいるのであるが。

There is nothing “modernist,” “postmodernist” or the least bit avant-garde about the technique. We are all writing fictitious versions of our lives all the time, contradictory but mutually entangling stories that, however subtly or grossly falsified, constitute our hold on reality and are the closest thing we have to the truth. (*Conversations* 253)

ロスが『事実』の時空で用いる手法 — 分裂する「私」の統合・集約を

拒否し、「私」像をそのまま並置しておく手法（相対し、統合を拒否する自我の状況）— は、ポストモダン文化において「複数のコンテクストが共存する結果、それぞれのコンテクストがその本来の場所を失って浮遊する」<sup>(7)</sup> 状態と相通ずるように思われる。そして、そのような「分裂する私像の並置」、あるいは「複数のコンテクストの浮遊」は、リオタールが指摘するところの、より大きなストーリー性を備えた包括的な「大きな物語」（97）が、衰退する一方で生じたものであるのかもしれない。さらに、『事実』において「私」に対して向けられていた断片化の作業は、『事実』に次いで1990年に発表された『いつわり』（*Deception*）において、語りの部分を殆ど削ぎ落として会話の断片を羅列するという形で継続されていくのである。そして、事実も見方によっては〈いつわり〉であるというモチーフは、文字どおり『いつわり』という題名を付けられた実験的作品へと繋がっていく。そしてそのモチーフは、ジョン・アップダイクによってもそのポストモダンの要素を指摘されることになる<sup>(8)</sup> 作品『オペレーション・シャイロック — ある告白』（*Operation Shylock: A Confession*, 1993）においても、主要人物をフィリップ・ロスに設定する仕掛けと共に展開されていくのである。

## 注

- (1) 本稿では、歴史上存在する作家フィリップ・ロスと、『事実』中の登場人物としてのフィリップ・ロスとの混同を避けるため、以後、作品中の登場人物であるロスは括弧付きで「ロス」と表記する。尚、作品中の語り手である「私 = フィリップ・ロス」<sup>イコール</sup> に関して同様に括弧付きで「私」と記す。
- (2) Linda Matchan は、『事実』における回想部分を “It [*The Facts*] is an unconventional autobiography, a sort of five-act drama — childhood in Newark, college at Bucknell, disastrous early marriage, object of Jewish wrath, literary fame and death of hated wife — in which the curtain falls at age 35.” (*Conversations* 239) と区分している。
- (3) ユダヤ教における聖句箱とは、邪悪な影響を退けるための魔除け（アミュレット）という意味を持っている。『ユダヤ教の本』の中では、聖句箱に関して、「一つは額に付け、もう一つは二の腕に付けたもの」であり、「ユダヤ教徒が今も祈りの際に額部分につけるこの聖句箱の中には、〈出エジプト記〉および〈申命記〉

の一節を記した羊皮紙が入れられており、それによって<sup>ヤハウェ</sup>YHWHの神名が象徴され、一切の魔の干渉からユダヤ教徒を守るものと信じられている」(『Books Esoterica 13号 ユダヤ教の本—旧約聖書が告げるメシア登場の日』, p. 155.)と言及されている。

- (4) 子供時代のロスにとってのミットの持つ魅力というのは、単に「野球のメンバーに加えられる」というだけの意味であったであろう。しかし、「55才の語り手ロス」は、このことをアイロニカルな視点から捉え直し、ミットの持つ魅力と“a great secular nationalistic church”とを絡めてここで表現している。このような視点や表現は、子供では出てこないであろう。また、“Jews should be excluded”という表現における「排斥される」(“be excluded”)という意識に関しても、同様のことがいえるだろう。いずれにせよ、この箇所でのミットに関する記述には、「55才の語り手ロス」の意識が色濃く出ているようである。
- (5) ロスはMervyn Rothsteinとのインタビューの中で、如何にして過去の事実確認を行っていったかについて、まずバックネル大学時代に関しては、“I think that my experience in college, for instance, at Bucknell, was as I wrote it — from a distance, of course, of many years. Sure, that may be a distorting factor. But I checked it out with various people. I talked to lots of people in my past. I didn't just rely on my memory. I sent that chapter to my old Bucknell English teacher. Not for a grade, though she gave me one. I said, 'Mildred, how did I do?' and she said, 'An A for content, a B for style.'” (Conversations 228-29)と述べ、さらにシカゴ大学時代、家族の間に交わされたやりとりに関しても、“When I wrote the Chicago stuff, I talked to friends who were there when I was there. I went out and walked around, because it quickens your memory. I spoke to my brother, I spoke to my father. I treated the job a bit as a journalist. I was my own fact checker.” (Conversations 229)と自己検証している。
- (6) 文化的コンテクストにおけるポストモダニズムの有り様について室井氏は、「〈大きな物語〉に対する不信と、内実を失った断片的な自己というふたつの特徴がポストモダンの知の状況を表している。そしてこうした状況に対する知的アプローチこそが〈ポストモダニズム〉と呼ばれるにふさわしい。それでは、そこにはどのような態度が存在するのだろうか？まず、断片化した知を再統合し、再配置する〈大きな物語〉を再構築しようとする支配的な流れが存在するだろう.... それに対して、リオタールのように、むしろ異質なものの異質の肯定を模索する立場がある。すなわち、けっして大きな物語に統合、編入されることのない異質性の自由な交通を開いていこうとする立場がそれである。」(『反美学—ポストモダンの諸相』302.)と解説の部分で簡潔に定義している。
- (7) 複数のコンテクストの共存と、それらの浮遊状態は、「たとえば、われわれは日本の生活様式の一部を守りながら、異文化のスタイルの一部を取り入れている。茶道で礼儀作法を習いながらハンバーガーを立ち食いし、コーラを飲みながらそばを食べ、畳の上でコンピュータを操作する。これらは何か新しく統合

されたひとつのコンテキスト作り出すわけではなく、ばらばらの形で並置されているだけである。」（『反美学—ポストモダンの諸相』 300-01.）という引用で具体的に説明されている。

8. アップダイクはロスの作品に関する小論の中で、『オペレーション・シャイロック』について，“It [*Operation Shylock*] should be read by anyone who cares about (1) Israel and its repercussions, (2) the development of the postmodern, deconstruction-minded novel, (3) Philip Roth.” (Updike 298-99) と述べている。

#### 引証資料

Roth, Philip. *Conversations with Philip Roth*, ed. George J. Searles. Jackson: UP of Mississippi, 1992.

——. *The Facts: A Novelist's Autobiography*. 1988. London: Jonathan Cape, 1989.

Updike, John. *More Matter: Essays and Criticism*. New York: Alfred A. Knopf, 1999.

ハル・フォスター編，室井尚・吉岡洋訳『反美学—ポストモダンの諸相』東京：勁草書房，1987.

ジェラルド・プリンス，遠藤健一訳『物語の位相—物語の形式と機能』東京：松柏社，1996.

ジャン＝フランソワ・リオタール，小林康夫訳『ポストモダンの条件—知・社会・言語ゲーム』東京：水声社，1986.

『Books Esoterica 13号 ユダヤ教の本—旧約聖書が告げるメシア登場の日』東京：学習研究社，1995.